

# 「惟」 に つ い て

## ——《書 經》語 法 札 記 1——

鈴 木 直 治

ま え が き

- 1・1 孤立語としての漢語のもつ基本的な制約
- 1・2 「惟」の本質
  - 1・2・1 2%をこえる高い使用頻度
  - 1・2・2 「惟」と応諾の声としての「唯」
- 1・3 「惟」の基本的な用法
  - 1・3・1 並列関係の単語の間に用いられる場合
    - 1・3・1・1 連詞の「暨」と「惟」
    - 1・3・1・2 「惟……惟……」という形で用いられる「惟」
  - 1・3・2 倒置された賓語の前に用いられる場合
  - 1・3・3 主語の前に用いられる場合
  - 1・3・4 繫詞のように用いられる場合
    - 1・3・4・1 「惟」は繫詞ではない
    - 1・3・4・2 「惟」は「雖」ではない

ま え が き

漢語は、西周以前と春秋以後とにおいて、そのもののいいかたに、かなり大きな変化が見られる。もちろん、その結語法の基本的な規律には変りはない。しかし、西周以前のものには、それ自体としては実義がないと考えられる虚詞が、きわめて多く用いられている。それらの虚詞には、孤立語的な漢語の表現を助けるものとして用いられているものが多いように考えられる。それで、漢語の孤立語的な言語としての表現上の特徴とその規律とを明らかにするために、《書經》について、上古漢語において問題になることを、ひとつひとつ研究してゆくことにした。

《書經》の中から用例をあげる場合に、その篇名の次に、《真古文尚書集釈》（加藤常賢、1964年10月、明治書院）の頁数と、《尚書今古文注疏》（孫星衍、1935年3月、商務印書館、国学基本叢書本）の巻数と頁数とを次のようにつけておいた。

……………（堯典 p. 16, 1—56）

これは、前者の16頁で、後者の1巻56頁ということである。また、この場合の＜堯典＞は、「偽古文尚書」においては、＜舜典＞になっているのであるが、そのことの注ははぶいた。

## 1・1 孤立語としての漢語のもつ基本的な制約

漢語は、その特徴として孤立語的なものである。それで、その単語と単語との間における語法的な関係は、西欧の言語などに較べて、聴き手の直観に期待していることがより多いものということができる。しかも、上古においては、その語彙は、単音節のものが多し。それで、その発話に際しては、まず、その個々の単語を明瞭に発音して、その個々の単語が明確に聴取されるようにすることを特に重んずる言語であるということができる。漢語には、現代語においても、西欧の言語におけるようなリエゾン的な現象が原則としてないということ、また、上古の音韻組織においては、一つの音節は、原則として、「子音+母音+子音」という構成を取っていて、母音に終る音節や母音に始まる音節がなかったということは、この漢語の特徴と密接な関係をもっていたものといわなければならない。

次に、その単語と単語との連結によって、ひとまとまりの意味を表わす連語または分句において、その相互の間の語法関係は、必ずしも特定の語法成分によって示されるとは限らず、これまた、聴き手の直観的な聴取にまかされていることが多い。それで、その連語または分句は、まず、なるべく、少数の単語、すなわち、少ない音節数で、ひとまとまりの意味単位をなすことが望ましいことになる。また、その個々の意味単位の間の切れめは、単語間の切れめよりも、更に明確なものでなければならない。

以上のようなことは、孤立的な言語としての漢語において、そのもののいいかたに対して課せられている基本的な制約ともいえる。漢語の語法は、このような孤立的な言語としての制約を背景にしているはずのものであり、上古漢語においては、このことが特に強く感ぜられる。《書経》の中において、きわめて高い頻度数をもって用いられている「惟」についての問題も、やはり、まず、このことを念頭において考えてゆかなければならない。

また、漢語は、前述のように、その語法関係の形式的な表示ということよりも、その聴き手の直観的な聴取ということに期待していることの多いものである。それで、そのもののいいかたは、その聴き手に対して、その単語または連語の間の語法的な関係を理解させることを主としているものというよりは、むしろ、その発話の意図を直接的に全体的に感じ取らせることを主としているものということができる。漢語の表現が、古来、抑揚を重んじ、語調を重んじているのも、もともと、この聴き手の情感にうたえ、その全面的な共感を得ようとするところから発達して来たものにちがいない。従って、この語調の問題も、漢語の語法の重大な背景をなしているものといわなければならない。

## 1・2 「惟」の本質

### 1・2・1 2%をこえる高い使用頻度

《書経》の中には、それ自体としては、なんらの実義をもっていないと考えられる単語が非常に多く用いられている。そのもっとも代表的なものが「惟」である。

この「惟」は、甲骨文の中に多く用いられている「隹」の修飾的な字体にちがいない。この「惟」という字体は、いわゆる「古文」の書きかたで、「古文尚書」では、「惟」と書いているのであるが、「今文尚書」では、「維」と書かれていたことは、漢石経の残字からしても明らかである。また、毛氏所伝の現在の《詩経》においても、「維」が用いられている。ただその字体が修飾的に変っているだけで、その字音の異なる違った単語であ

ったわけではない。

現存の《書經》の総字数は、「偽古文尚書」および「書序」を除けば、16,933字であるが、その中に用いられている「惟」は、総数396字であって、その総字数に対する使用率は、実に、2.33%強になっている(注1)。《詩經》においては、その総字数29,645字に対して、「維」の使用総数は258字、その使用率0.87%強で、《書經》よりは、かなり低くなっているものであるが、全体的に見て、その使用頻度は、なおきわめて高いものといわなければならない(注2)。

《書經》の中には、春秋以後になってから作られたと考えられる篇も少なくないのであるが、その用語や表現のしかたは、全体として西周以前の上古漢語に基づいているものと考えられる。それで、このように「惟」の使用頻度の高いことは、この西周以前の上古漢語における重大な特徴といわなければならない。春秋以後のものにおいては、例えば、《論語》の中には、「維」は、《詩經》から引用したものの中に、ただ1字、「惟」は、全部でただ2字、しかも、その中の1字は、《書經》からの引用のものである(注3)。その言語に、大きな変化のあったことを知ることができる。

### 1・2・2 「惟」と応諾の声としての「唯」

「惟」は、前述のように、「隹」の修飾的な字体であるが、その「隹」も、甲骨文に用いられているものは、ただその字音だけを借用した仮借字で、それ自体にある実義をもっていたものとは考えられない(注4)。また、注意すべきことは、甲骨文の中においても、すでに、その「隹」を「唯」と書いているものもあったということである(注5)。

「唯」は、《広雅》(釈詁)に、「独也」とあり、春秋以後の文献には、この意味と見られる用例が多い。しかし、「惟」「維」「唯」の3字は、《広韻》でも同音のもので、古代においても、多くあい通じて用いられているものである。例えば、《論語》の中には、前述のように、「惟」「維」は、あわせて3字しか用いられていないのであるが、「唯」は16字用いられており、その中には、「独」のような実義をもつものとはいえないものがある。また、《孟子》の中には、それとは反対に、「唯」は1字もなく、「維」が《詩經》から引用のもの1字、「惟」が44字用いられているが、その「惟」の中には、「独」の意味と解しうるものが少なくない。

しかし、この「唯」は、《説文》には「諾也」とあり、これがその本義に近いものと考えられる。「唯」が、応答の際の発声を表わすものとして用いられていたことは、《論語

(注1) 《書經》の総字数は、顧頡剛主編の《尚書通檢》にあげてある「尚書本文」(相臺本)によって計算した。「惟」の使用総数も、この《尚書通檢》により、「偽古文尚書」のものを除いて計算した。

(注2) 《詩經》の総字数、および「維」の使用総数は、森本角蔵氏の《五經索引》によった。

(注3) 《論語》の中には、「惟」「維」の外に、「唯」が16字、「雖」が31字ある。この「唯」「雖」については後で述べる。

(注4) 「隹」は、《説文》には、象形文字で、「短尾禽の総名」と説かれている。甲骨文中の「隹」は、その字音を仮借したものである。貝塚茂樹氏は、卜辞中の「隹」について、一応「唯に通じ、発語の虚詞」と説きながらも、「恐らく単なる発語の詞というよりは、意味をもった実字に近い用法であったと考えられる」と述べている(《京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字》1960年、京都大学人文科学研究所、p. 149, p. 156参照)。しかし、《書經》に見える「惟」については、特別の実義をもっていたものとは考えられない。

(注5) 《甲骨文字集釈》(李孝定、1965年6月、中央研究所歴史語言研究所)第2、p. 365参照。なお、「惟」「維」は、甲骨文の中には、まだ見出されていない。

》《左伝》その他に、その用例が多い(注6)。これによれば、「唯」は、この応諾の声を表わす一種の嘆詞ともいうべきもののよう考えられる。

「唯」は、《広韻》の反切によれば、「以」母(「喻」4等)のもので、その上古音は、おそらくは、喉音の系統のものと考えられる(注7)。<堯典><皐陶謨>の中で、応答の語として用いられている「兪」も、《広韻》「以」母のものである。《礼記》(内則)にも、「男の子には唯といわせ、女の子には兪といわせる」とある。この「兪」もまた、それ自体として特定の意義をもつものではなく、その喉音的な発声音が、応諾の意味を表わすものとして用いられているに過ぎない。それで、この「唯」「惟」「維」は、ともに、この喉音的な音声を表わすための仮借字というのが、その本来の姿であったと考えられる。

《広韻》においては、この「唯」について、その「独」の意味のものと、「諾」の意味のものとは、その声調が異なるものとしている。すなわち、前者は、「惟」「維」と同じく、平声「脂」韻とし、後者は、上声「旨」韻に属するものとしている。これは、「唯」が男性の応答語として用いられた場合、力強くはっきりと尻あがりに発声される傾向のあったことによるものかとも考えられる。しかし、応答語の性質として、その発声の長短高低は、常に同一のものであったとは考えられない。それで、この「唯」を二つの声調のものに分けることは、意味が分化して一語としての統一が破れたものに対して、声調の上からも二語として区別しようとする意図による作法的なもののように考えられる。この両種のもものは、もともと、一つのものであったにちがいがなく、しかも、もともととは、ある実義を表わすものではなく、ただ喉音的な発声音を表わすものであったにちがいない。

応諾の発声音を表わす場合に、この「唯」を重ねて、「唯唯」としていることがよくある(注8)。しかし、《荀子》(大略)の中に、このような意味の場合に、「惟惟」と重ねているものがある。これは、応答の発声音としての「唯」も、「惟」と同音のものであったということを旁証するものといえることができる。この《荀子》の例について、その楊倞の注に、「惟は唯と読み、以癸反」とあるのは、「唯独」の「唯」と「唯諾」の「唯」とを、声調の上からも区別しようとするその当時の通説に従ったものに過ぎない。

### 1・3 「惟」の基本的な用法

#### 1・3・1 並列関係の単語の間に用いられる場合

##### 1・3・1・1 連詞の「暨」と「惟」

上古漢語における単語は、前に1・1で述べたように、原則としてリエゾンの連声を

(注6) 《論語》の中から1例をあげておく。子曰：“参乎！吾道一以貫之。”曾子曰：“唯。”(里仁)《釈文》に、この例の「唯」について「維癸反」とあり、上声のものとしている。この種の「唯」を上声のものとするのは、六朝以来の音韻家の通説である。

(注7) 藤堂明保氏の説くところによれば、中古音「以」母(「喻」4等)は、上古においては、「d」と特に縁の深いものであるが、「匣」母および「于」母(「喻」3等)などと通転することの多いものである(《中国語音韻論》1957年1月、江南書院、p. 296参照)。また、藤堂氏は、その《漢字語源辞典》(1965年9月、学燈社)において、「匣」母の上古音を「h」, 「于」母を「h」, 「以」母を「d」<sub>0</sub>と推定している。その「d」<sub>0</sub>は、「d」の閉鎖の弱いものである。濁音で閉鎖が弱いということは、喉音的なひびきのあるものと考えられる。

(注8) 「唯唯」の一例

楚王曰：“唯唯。誠若先生之言……”(史記・平原君列伝)

しないものである。それで、その句中における語法的な機能が同一な単語を並列する場合、その単語の切れめ切れめにより注意して発音するだけでもよいのであって、《書経》の中にもその例は多い。しかし、また、その間に連詞のように見えるものを用いていることも少なくない。この連詞のようなものとして、「暨」を用いていることもあるが、「惟」や「越」を用いていることが多い(注9)。

(1) 淮夷蠙珠暨魚。(禹貢 p. 32, 3—16)

〔《史記》(夏本紀)には、「暨」の字が「泉」の字になっている。これは、「今文尚書」の書きかたである。〈索隱〉に、「泉、古暨字、泉、與也」とある。〕

(2) 厥貢惟金三品・瑋・琨・篠・簋・鹵・革・羽毛惟木。(禹貢 p. 33, 3—20)

〔《経伝釈詞》(vol. 3)に、「惟、猶與也、及也」と説き、この句を引例している。〕

(3) 猷大誥爾多邦越爾御事。(大誥 p. 85, 14—32)

〔《経伝釈詞》(vol. 2)に、「廣雅曰：越、與也」と説き、この句を引例している。なお、「猷」の字は、馬融本では、「繇」に作り、かつ「大誥」の次にある。《経伝釈詞》(vol. 1)に、「爾雅曰：繇、於也」と説き、この句を引例している。〕

上例(1)の「暨」は、上に注記しておいたように、「今文尚書」には「泉」と書かれていたもので、「及」の意味を表わす動詞から転じて、並列関係にあることを表わす連詞として用いられるようになったものにちがいないと考えられる(注10)。それで、例(2)例(3)の「惟」「越」も、上例のような場合、その形式だけからすれば、これと同じ機能の連詞としてもよいようにも見える。しかし、このことについては、そう簡単にかたづけられるわけにはいかない点がある。

上例(2)の「惟」について、その注記しておいたように、《経伝釈詞》には、「與」の意味のものとしている。上の例句の意味を讀解する上からしては、その解釈は当たっているといえることができる。しかし、《経伝釈詞》は、その王引之の「自序」によってもわかるように、もともと、経伝の語句の意味を讀解することのために作られたものである。それで、「惟」についても、その場合によって、上述の「與」のほか、なおいろいろな他の虚詞の意味のものとして用いられることがあげられている。しかし、この「惟」が、なぜにそのように幾多の機能のものとして用いられるのか、ということについては、なんら説かれていない。《経伝釈詞》の説によって、古典の語句が讀解できるようになったものの多いことはたしかである。現代においても、《書経》の解釈に《経伝釈詞》の説をそのままに引用されていることが多い。しかし、一つの単語が、いろいろな機能のものとして

(注9) 「暨」は、《書経》全体で7例、その中、3例は〈堯典〉中のものである。また、〈堯典〉には、この「暨」以外に、この種の並列関係を表わすような虚詞を用いていない。〈堯典〉は、このように、その語法成分の整理が行なわれている点からしても、後出のものであることがわかる。なお、春秋戦国の頃の言語においては、この種の関係を表わす連詞は、単一的に「與」によって表わされる傾向にあった。これもまた、語法成分の発達整理の線に沿った現象である。「越」は、並列関係以外に、なおいろいろな用いられている。「偽古文尚書」を除き、その総使用数は63字、その中、58字までが〈周書〉の中に用いられている。《広韻》では、「于」母「月」韻、これまた、上古音喉音系のもので、「惟」と同類の実義をもたない喉音的な音声を表わしているものである。

(注10) 「暨」は、次のような用例からしても、もともと動詞として用いられていたものであることがわかる。

東漸于海，西被于流沙，朔南暨声教，訖于四海。(禹貢 p. 41, 3—53)

《漢書》(地理志，下)に、この句を引用し、「暨」を「泉」に作っており、顔師古の注に、「泉、及也」とある。なお、この句においては、《尚書叢詁》にいうように、「及預」の意味である。

用いられるということは、その単語の本質からして、それぞれの機能のものとして用いられる理由が説明されてこそ、それで初めて、語学的にもたしかにその機能のものであるというわけである。そのような説明がなければ、それは、その個々の場合についての望文生義的な解釈に陥りやすいものになり、その語句の意味は、一応わかるようになったとしても、語学的にその正しいことを立証することはできなく、また、その表現の背後に働いている重大な語法的な規律が看過されてしまうおそれがある。

上例(2)の「惟」において、それを「與」の意味の連詞と見ることによって、その句意が理解しやすいものになることはたしかである。しかし、「惟」は、前述のように、仮借字であって、もともと、喉音的な音声を表わすためのものである。してみれば、上例(2)の「……齒・革・羽毛惟木」という表現は、必ずしもこの「惟」があるから、その「羽毛」と「木」とが並列関係にある名詞であることが示されているのであるとはいえない。この項の最初にも述べたように、並列関係の名詞の間に連詞を必須とするものではなく、現に、「齒」「革」「羽毛」の間には連詞がない。発話の際には、その切れめをはっきりさせるために、若干のポーズをおけば、それでもよかったわけである。しかし、上古漢語においては、呼気を停止してその切れめを明らかにする表現法とならんで、意味のない喉音的な音声を出して、それによって、単語と単語との間に「ま」をおく表現法も行われていたのではないかと考えられる。

もちろん、上古漢語にも、「暨」のように、並列関係を表わす連詞があったことはたしかである。この「暨」は、前述のように、動詞から転じて、連詞としての機能をもつようになったものにちがいないし、かつまた、次の例に見られるように、共同して動作する人物を表わす介詞としても用いられるものである。

(4) 予乗四載，随山刊木，暨益奏庶鮮食。(阜陶謨 p. 22, 2—67・68)

〔《史記》(夏本紀)には、「……與益予衆庶稻鮮食」とあり、その<索引>に、「予音與，上與謂同與之與，下予謂施予之予，此禹言其與益施予衆庶之稻糧」とある。〕

動作の共同者を表わす介詞として用いられるものが、また並列的な共在者を表わす連詞として用いられることは、春秋以後における「與」、現代語における「跟」「和」などにおいても同様である。それで、これは、漢語における一つの特徴的な傾向ともいえる。この点からしても、上例(1)のような「暨」は、たしかに連詞としての機能のものであるということができる。しかし、「惟」については、このような介詞としての用法も見られず、並列関係の連詞としての機能をもちうるような意味が内蔵されていたものともいえない。それで、上例(2)のような「惟」は、やはり、呼気の休止の代りに、喉音的な音声を発していることを表わしているものに過ぎず、強いていえば、単語間の切れめを表わす助詞的な機能をもつ発声ともいえるもののように考えられる。

「惟」のこのような働きは、次のような例からしても考えられる。

(5) 爾大克羞考惟君，爾乃飲食醉飽。(酒誥 p. 104, 16—57)

〔「汝らは大いによく年老いた人や目上の人におすすめするなら、汝らは、それでこそ、飲み食い酔い飽けるようになる」という意味。〕

俞越は、この句について、“「考」は即ち老，「君」は即ち長である。「考君」と文字を連ねれば、ことばにならないから、それで「惟」を加えて、句を作りあげた。……「考惟君」とは、「考與君」ということである。”(《群經平議》vol. 5)と説いている。そのつけて書けば、ことばにならない、というのは、それが緊密な結合をしているもののように受け取られるために、意味のわからないものになる、ということにちがいない。それで、こ

の「惟」の働きは、その結合を破るためのもの、すなわち、その間に切れめをおくためのもののように考えられる。

### 1・3・1・2 「惟……惟……」という形で用いられる「惟」

「惟」は、前述のように、単語間の切れめを表わす助詞ともいえるような場合がある。しかし、また、単に切れめを表わすためだけの音声とはいえないような用法もある。それは、次の例のように、並列関係にあるものの前に、それぞれ、この「惟」が用いられていることがよくあるからである。

- (1) 矧<sup>レ</sup>惟<sup>レ</sup>外庶子訓人、惟<sup>レ</sup>厥<sup>レ</sup>正人、越<sup>レ</sup>小臣・諸節、……(康誥 p. 98, 15—51)

〔「また、外庶子の教育係、およびその長官、および小臣や諸節たちが、……」という意味。〕

上例においては、その並列関係にある名詞の前に、それぞれ、「惟」「惟」「越」が用いられている。その「越」は、もちろん、前項で例(3)としてあげた種類のものである。このような例においては、少なくとも、その初めにある「惟」については、切れめを表わすものとはいえない。これは、その次の単語または連語をいい出す前に、まずゆるやかに喉音的な音声を発して、その次にいい出すことばに対して、聴き手の注意を喚起し、それに注意を集中させようとしているもののように考えられる。してみれば、上例のその次の「惟」についても、やはり、このような働きがあることが考えられる。この2番目のものにおいては、これによって、その前の単法との間に、「ま」がとられていることもたしかである。しかし、これも、単にその「ま」を取るためだけに用いられているのではなく、むしろ主として、その次の単語を強調するために用いられているものと考えられる。

このように、「惟……惟……」と前後あい応ずるような形式で用いることは、単に名詞を並列的にならべるときだけではなく、述語としての機能の動詞性のものを並列している際にもよく見られる。

- (2) 亦惟<sup>レ</sup>君惟<sup>レ</sup>長、不能<sup>レ</sup>厥<sup>レ</sup>家人、越<sup>レ</sup>小臣外正、惟<sup>レ</sup>威<sup>レ</sup>惟<sup>レ</sup>威、大放<sup>レ</sup>王命、乃非<sup>レ</sup>徳用<sup>レ</sup>乂。

(康誥 p. 98, 15—51)

〔「また、君と長とが、その家人および小臣や外臣をよく導かず、おどしたり虐げたりして、大いに王の命令に逆えば、それは、徳でもって治めるものではない」という意味。〕

上例の「惟威惟虐」といういいかたは、語調を整えようとしていることもたしかであるが、その「惟」は、やはり、その次の単語に対して、聴き手の注意を喚起しようとしているものといえることができる。

「惟」は、このように、その次の単語を強調する働きをしていることの多いものである。この働きは、もちろん、並列関係にあるものだけに用いられるわけではない。

- (3) 汝作<sup>レ</sup>秩宗。夙夜<sup>レ</sup>惟<sup>レ</sup>寅、直<sup>レ</sup>哉、惟<sup>レ</sup>清。(堯典 p. 14, 1—51・52)

〔「汝は秩宗となれ。夙夜つつしみ、正直であれ、(また)潔白であれ」という意味。《史記》(五帝本記)には、「夙夜維敬、直哉、維清潔」となっている。〕

上例において、その「寅」「直」「清」は、訓戒しようとすることを三つならべているのではあるが、そのいいかたは、それぞれ違っており、その「惟」は、それらの単語が並列関係にあることを表わす働きを兼ねているものなどとはいえない。

## 1・3・2 倒置された賓語の前に用いられる場合

動詞とその賓語という関係での連語構成、いわゆる動賓構造においては、「動詞→賓語」という語順を取るのが、漢語の基本構造としての原則的な規律である。ただ、その賓語が指示詞である場合には、上古においては、反対の語順を取っているものが多い。しかし、これは、上古においても、指示詞にかぎった特殊な例外である。それで、指示詞以外のものが倒置されているのは、通常の表現とはなにか異なった意図があるはずであり、また、その場合、その表現形式の上においても、通常のものとは異なったところがあるのが、その通常である。

「惟」がその倒置された賓語の前に用いられているのは、その賓語に対して特に注意を喚起し、その賓語を強調しようとするものにちがいない。

- (1) 寧王惟卜用，克綏受茲命。(大誥 p. 88, 14—36)

〔<偽孔伝>に、「以文王惟卜之用，故能安受此天命」とある。〕

- (2) 惟茲惟德稱，用乂厥辟。(君奭 p. 147, 44—112)

〔「慈しみのあるもの、徳のあるものを挙げ用いて、その君を助けた」という意味。〕

その倒置された賓語の次に、更に「之」「是」などの指示詞を用いているものもある。

- (3) 不聞小人之勞，惟耽樂之從。(無逸 p. 139, 21—104)

- (4) 惟慢遊是好，傲虐是作。(臯陶謨 p. 26, 2—81)

これらの「之」や「是」は、その次の動詞の賓語で、それが動詞の前に倒置されているものである。また、この「之」や「是」は、もちろん、その前に提示されている単語を指示しているものである。それで、「惟」の次にある単語は、その動作の対象として再提示されていることになるわけで、その動作の対象となることがらが、更に強く強調されているものということができる。また、上例(4)の後半に見られるように、「是」または「之」だけを用いて、「惟」を用いていないものもあるが、もちろん、「惟」のある方が、それだけ強調の度合いが強いものといううる。

また、上例(3)(4)のような場合にも、その発話の際には、「惟」の次の単語の後のところで、おそらくは、若干のポーズがあったものと考えられる。次のような例からしても、そのように考えられる。そのポーズによって、その次の指示詞による再提示が、より効果的なものになる。

- (5) 今商王受，惟婦言是用，……………乃惟四方之多罪逋逃，是崇是長，是信是使，是以為大夫・卿士，……(牧誓 p. 66, 11—111・112)

〔「逋逃」は、逃亡者のこと。「崇」も「長」も、尊敬する意味。〕

上例のような「惟→賓語→是(または之)→動詞」という形式による表現は、春秋以後の文献にも多く見られる。また、《論語》においては、前述のように、「惟」の字は、全体としてきわめて少なく、このような場合にも、「唯」の字が用いられている。

- (6) 父母唯其疾之憂。(為政)

次に、この種の「惟」「唯」は、前述のように、その次の名詞に対して特に注意を喚起するために発せられた音声で、それが賓語を強調し倒置する場合にも用いられていたものと考えられるものである。しかし、この種の「惟」「唯」は、「独」の意味を表わすものとしている人が多い。すなわち、王引之も、上例(3)の「惟」を「独」の意味のものとしており(《経伝釈詞》vol. 3)、楊伯峻も上例(6)の「唯」を「只」「独」「僅僅」の意味の副詞とし(《論語訳註》1958年1月、科学出版社)、この形式は動作の対象が単一性の



ものであることを表わすものとしている（《文言語法（増訂本）》1957年5月，北京出版社，p. 191）。

「唯」は、前に1・2・2に述べたように、《広雅》で「独也」と説かれているもので、春秋以後の文献には、この意味と見られる用例が多いことはたしかである。「唯独」「独唯」と連用されているものも多く、それらはほとんど成語化していたものと見られることからしても、このことがわかる（注11）。しかし、「唯」は、本質的には、喉音的な音声を表わすための仮借字で、「独」の意味の副詞に転じうるような実義をもっていたものではない。「唯」が「専辞」とも説かれ（《助字辨略》vol. 1）、単一性を表わす副詞のように用いられるようになったのは、その次の単語を強調することから生じて来たものにちがいない。上例のような場合においても、その賓語となるものを強調するということは、その動作がその対象に対して、集中的に専一的に排他的に行われることをいい表わそうとしているものということができる。

「唯」が、このように、単一性・専一性を表わしているように見られるのは、もちろん、上述のような形式で賓語を倒置している場合だけに限られているわけではない。その賓語を倒置せずに、「動詞→賓語」という通常の語順を取っているものの前においても、もちろん、この種の「惟」が用いられる。その場合は、その賓語だけではなく、その賓語を対象としたその動作全体を強調しているもので、やはり、その動作の専一性をいい表わしているものということができる。《助字辨略》には、次例の中の「惟」も、その「専辞」の一例としてあげられている。

（7）啓呱呱而泣，予不子，惟荒度土功。（皐陶謨 p. 26, 1—82・83）

〔「啓は呱呱と泣いたが、予は子としていつくしまず、ひたすら大いに土木の仕事をはかった」という意味。〕

しかし、「惟」は、このように、その強調することによって、その専一性・単一性をいいあらわすのに多く慣用されている中に、かなり早くから、専一性・単一性の意味を表わす副詞的な性質をもつようになって来ていたものと考えられる。次の例などは、そのような性質のものといえる。

（8）不惟不敢，亦不暇。（酒誥 p. 106, 16—59）

〔＜偽孔伝＞に、「非徒不敢，志在助君敬法，亦不暇飲酒」とある。〕

### 1・3・3 主語の前に用いられる場合

「惟」は、また、よく主語の前に用いられている。この場合にも、その主語を強調するのに用いられていると見られるものが多い。

（1）孟侯，朕其弟小子封！惟乃丕顯考文王，克明德慎罰，……（康誥 p. 93, 15—43・44）

〔「孟侯よ、朕の弟である小子の封よ。汝の丕顯なる父の文王は、……」という意味。〕

上例は、その主語を強調し、その主語の人物に対して、聴き手の注意を喚起しているものということができる。

一篇の文の冒頭において、まずこの「惟」を用いて、その主題となる人物をあげているものもある。これも、もちろん、直接には、その人物に対して注意を喚起しているもので

（11）「唯独」については《聯綿字典》（符定一，1964年9月，台湾中華書局）上冊 p. 700に、豊富な用例がある。「独唯」についても、その字典の中冊 p. 2736に、《史記》の中の用例があげられている。

あろうが、最初にまず、その主題とする人物に強く注意を喚起することは、その文全体にわたる話し手の発話の意図の中心は、その人物にあるということ、その聴き手により強く伝えようとするもので、その文全体がその中心となるものによって貫かれ、全体としてより力強い表現になるもののように考えられる。次の例は、周公が武王の病気の平癒を祈る冊書の冒頭のことばである。

(2) 惟爾元孫某，遘厲虐疾。……（金縢 p. 81, 13—19）

〔「某」は、武王の名を書くことを諱んで、後に改めたもの。「遘」は、「遇」の意味。〕

一つの長い叙述の中で、ある一段落がついて、新しい文段に入るときに、その主語の前に用いられていることも、よく見られる。これもまた、その新しく登場して来る人物に対して注意を喚起するものということができる。

(3) 惟二月既望，越六日乙未，王朝步自周，則至于豊。惟太保先周公相宅。……（召誥 p. 114, 18—67・68・69）

上例は、＜召誥＞篇の冒頭の叙述であるが、「惟太保……」というところから、話の筋が変わって来ている。それまでのところでの中心人物は「王」であったのに対して、このところからは、「太保」である。その「惟」は、この新しく叙述の中心となる人物に対して注意を喚起しているわけである。

なお、上例(3)の最初の「惟」は、日時を示すことばの前に用いられている。これは、次の事件を述べる前に、まず、何時のことであったか、ということに、注意を喚起しているものである。このように、ある事がらを述べるにあたって、まずその日時をはっきりと示すことは、次に述べる事がらは、その日時もはっきりしているもので、確実なものであるということ、その聴き手に伝えようとする表現法であったと考えられる。＜洪範＞＜多士＞の篇なども、冒頭にまず「惟」を用いて、その日時を明示しているが、いずれも、その次の事柄を確実なものとして伝えようとする表現法であったと考えられる。

また、その主語を強調するという点においては変りはないのであるが、一種の単一性・排他性をいい表わそうとする気持が含まれていると見られるものもある。

(4) 昔公勤勞王家，惟予冲人弗及知。今天動威，以彰周公之德。惟朕小子其新逆。  
（金縢 p. 84, 13—29）

〔「予冲人」「朕小子」は、ともに成王が自分のことを謙遜していったもの。「新逆」の「新」は、馬融本では「親」に作る。「逆」は、「迎」の意味。〕

上例において、次の「惟朕小子其新逆」とあるのは、「ほかのものを迎えにやるのではなく、自分が直接に迎えにゆこう」ということで、その「惟」は、その主語を強調して、その動作を行うものは、ほかならぬその主語の位置にあるものであることをいうものと見られる。それで、このように、動作の主体としての主語を強調することは、一種の排他的・単一的なことをいい表わそうとする気持が含まれているということができる。その前句における「惟予冲人弗及知」も、同様にその主語を強調しているものであるが、「周公が王家のために苦勞していたことは、その側近のものは知っていたのに、（実に）自分はこれまで知らなかった」ということなのであるから、やはり、その強調の中には、「独」ともおきかえるような気持が含まれているものということができる。春秋以後の文献に多く見られる「独」の意味の「惟」「唯」は、もともと、このような用法から発達して来たものにちがいない。

(5) 惟我與爾有是夫。（論語・述而）

(6) 唯仁者，能好人，能惡人。(論語・里仁)

また、この「惟」によって、その動作の主体となるものとしては、意外に思われるような極端な人物を主語として提示していることがある。

(7) 咸若時，惟帝其難之。(皐陶謨 p. 18, 2—29)

〔「みなそのようになれるということは、帝でも難しいとするでしょう」という意味。〕

この例において、「帝」は「舜」のことをいうものであるが、舜は万能に近い理想の極致的人物と考えられているということを前提として、「その舜でさえも」といっているわけである。この種の「惟」も、やはり、その主語に対して注意を喚起することから生じて来た用法のものにちがいない。極致的な人物を主語としていい出そうとするからこそ、まずその人物であることに注意を喚起し、特に強調しているものにちがいない。

しかし、《尚書叢話》には、この場合の「惟」は、「雖」と読むべきものであろうといっている。たしかに、春秋以後の「雖」には、このような用法があり、そのように字を改めて読む方が、現代人にとっては理解しやすい。しかし、上古の漢語を論ずるには、まず、上古の漢語としての立場から考えるべきであり、いわゆる破字は、できるだけつしまなければならぬ。「惟」と「雖」との関係については、次項に述べることにするが、この「雖」と読む説には賛成しがたい。

なお、春秋以後の文献においても、なおこの種の「惟」の用法が見られる。

(8) 惟耳亦然。……惟目亦然。(孟子・告子上)

この例についても、その「惟」を「雖」と通じて用いられたものとする説がある(《古書虚字集釈》 vol. 8)。

### 1・3・4 繫詞のように用いられる場合

#### 1・3・4・1 「惟」は繫詞ではない。

主述関係にある単語と単語との間において、その述語部分が名詞・形容詞・動詞である場合、それぞれ、判断式・描写式・叙述式という。現代語においては、判断式には、原則として、繫詞「是」を用いるのであるが、上古漢語においては、繫詞を必須としない。しかし、《書経》の中には、判断式に「惟」を用いていることがよくあり、あたかも繫詞のように見える。それで、この種の「惟」を「是」「為」の機能のものとする説もあった(注12)。しかし、次のような例を見ても、その「惟」が語法的に必須なものではなかったことが明らかである(注13)。

(1) 厥土惟白壤。(禹貢 p. 30, 3—4)

〔「その土は、白い柔土である」ということ。《史記》(夏本紀)には、「惟」の字がない。〕

(2) 厥土黑墳。(禹貢 p. 31, 3—10)

〔「その土は、黒いこえた土である」ということ。〕

また、この「惟」は、単に判断式に用いられることがあるだけでなく、描写式・叙述式にも、用いられることがあるのであるから、明らかに繫詞などとはいえないものである。

(3) 厥草惟夭，厥木惟喬。(禹貢 p. 33, 3—19)

(注12) 例えば、楊樹達の《詞詮》には、「不完全内動詞」で、「是」「為」の意味のものとしている。

(注13) 王力の《漢語史稿》中冊(1958年4月，科学出版社，p. 350)にも、次の例(1)(2)などを引用して、繫詞とは見るべきでないことを論じている。

〔馬融の注に、「天、長也」とある〕

(4) 今予<sup>○</sup>惟恭行天之罰。(甘誓 p. 44, 4—57)

このように、結語法の上の規律からいえば、用いなくてもよいものなのに、なぜに上例のように、「惟」を用いているのかということが問題になる。

まず、例(4)についていえば、これは、前に1・3・2に、例(7)としてあげた「惟」と同じ種類のもので、その次の動作を強調しているものにちがいない。この例は、これから戦に赴こうとする夏の王が、その將軍たちにいったことばで、「天命を奉じて天罰を行うぞ」と、その動作を強調して述べているわけである。しかし、上例(1)(3)については、これにならって、その次の述語を特に強調しているものと見ることはできない。それで、更に違った角度からして考えてゆかなければならない。

例(1)は、＜禹貢＞の中で最初にあげられている冀州について、その土質を述べたものである。＜禹貢＞には、更にづいて、合計9の州についての記述があり、それぞれの州について、その土質、田地や賦税の等級、貢物、その他いろいろなことが記述されている。しかし、その中で、この「土」「田」「賦」「貢」の4項については、9州いずれにも、そのことについての記述があるので、それぞれの記述のしかたについて、「惟」を用いているものと、用いていないものとを調べたところ、次のような表になる。

州名 項目	冀州	兗州	青州	徐州	揚州	荊州	豫州	梁州	雍州
土	○	×	×	×	○	○	○	×	○
田	○	○	○	○	○	○	○	○	○
賦	○	×	×	×	×	×	×	×	×
貢		×	×	○	○	×	×	×	○

○印は、「惟」を用いているもの、×印は、用いていないもの。冀州については、貢についての記述がない。

冀州については、土・賦・田の順序で記述されているが、その他の8州は、いずれも、土・田・賦・貢の順序で記述されている。

＜禹貢＞は、その内容からして、単調なくだしい記述になりやすいものである。しかし、上の表における「惟」の有無によっても明らかのように、つとめてその表現の上に変化を与え、単調なものに陥いることを避けようとしているものということができる。特に注意すべきことは、その「田」と「賦」とは、ともにその等級についてのもので、「上の上」から「下の下」までの記述であるのに、その「惟」の有無は、全く反対になっており、全体を通じて、変化と調和の妙をきわめているものということができる(注14)。それで、上例(1)における「惟」も、まったくこのような修辭的な意図から用いられてい

(注14) <禹貢>は、恐らくは、春秋以後に作られたものであろうが、このように高度な修辭性をもったものが、古くから作られていたことは、驚歎に値する。なお、<論語>の<郷党>篇の中にも、孔子の日常の言行が、きわめて修辭的に記述されており、漢語における修辭は、かなり古くから、高度に発達していたことがわかる。拙論：<論語はどの程度まで話しことばに近い><金沢大学教養部論集・人文科学篇Ⅰ> (1963年) 参照。

るのであって、その次の述語になるものを特に強調しようとするものとはいえない。

また、例(3)については、これまた、修辭的なものと考えられる。すなわち、その2音節の主部に対して、その述部をも2音節にし、4字句の対句を作りあげようとしているものといえる。それで、この「惟」もまた、特に強調するためのものとは考えられず、ただ音節数を整えるために、ゆるやかに発声されていたものかと考えられる。

### 1・3・4・2 「惟」は「雖」ではない。

前述のように、上古漢語において、その判断式に「惟」を必須とするものではない。しかし、《書經》の中に、その判断式に属するものの中で、必ずこの「惟」を用いている形式のものがある。次例のようなものである。

- (1) 予惟小子，不敢替上帝命。(大誥 p. 88, 14—36)

〔「替」は、「廢」の意味。〕

- (2) 爾惟舊人，爾丕克遠省。(大誥 p. 89, 14—37)

〔《漢書》(翟方進伝)に、「丕」を「不」に作っている。〕

上例のような場合、その「惟」を用いなくても、漢語の結語法の基本的な規律にそむくわけではない。それなのに、なぜに必ずそれが用いられているのかということが問題になる。

まず、第一に、これは、同格的なものと誤解されることを避けようとしたものといえることができる。上例(1)において、その「惟」をはぶいて、「予小子」と連言するとすれば、それは、話し手が自身のことをいうことばと誤解されるおそれが多分にある。「予小子」といういいかたは、《書經》の中に、かなり多く見られるもので、自己の謙称として慣用されていたことばにちがいない。

- (3) 予小子新命于三王。(金縢 p. 82, 13—22)

〔これは、周公が自分自身のことをいったもの。「三王」は、周の先祖の三人の王のこと。〕

また、例(2)については、「爾舊人」というような慣用語があったわけではない。しかし、「爾多士」というように、同格的に用いている例は、かなり多く(<多士>篇)、また、《書經》においては、いわゆる人称代詞の次に、人を表わす名詞が直接につづけて用いられているものは、それは、通常、同格的なものである。それで、やはり、同格的なものと誤解されるおそれがある。

いったい、上古漢語においては、名詞が連記されている場合、その形式の上からだけでは、判断式の主述関係のものか、並列関係のものか、ということを区別することができない。その識別は、原則的には、その個々の単語の意味と、その前後の関係から、そのいずれの関係であるかを直観的に看取しなければならない。また更に、並列関係の中にも、前に1・3・1に述べたような対立的な並列と、前述の「予小子」のような同格的な並列とがある。漢語は、それだけ、聴き手の直観に期待している言語である。しかし、その直観に安心して期待しておれる場合は、そのままでよいとしても、若干でも不安があるときは、やはり、その表現の上でなにかの工夫がなされなければならない。そのような場合、対立的並列関係のものについては、前述のように、「暨」「惟」「越」などを用いることができる。しかし、同格的並列関係のものにおいては、そのような虚詞もなく、その間のポーズも短かったものらしい。

上例(1)(2)のような場合は、正にこの直観的な識別の上に不安の感ぜられる場合

である。それで、その「惟」は、それによって、同格的なものではないということを表わし、誤解を避けるために用いられているもののようにも見ることができる。しかし、それだけでは、なお不十分な点がある。

次に、この例(1)(2)のような形式のものにおいては、その前後の分句は、その意味の上からすれば、必ず転折の関係にある。すなわち、例(2)は、「おまえらは古くから仕えているものだ、(それなのに)おまえらは遠く古いときのことを反省しない」ということであって、その相手が「舊人」である以上、当然やるべきはずのことをやっていないことを責めているわけである。それで、前の分句における述語の「舊人」ということは、この発話の中で、意味の上から、大きな重点がおかれているものである。従って、その前の「惟」は、このことばに注意を喚起し、それを強調する働きのものであり、そのためにこそ、この「惟」が用いられているものといわなければならない。

しかし、この種の「惟」については、現在でもまだ、一般にそのように説かれてはいない。《古書虚字集釈》(vol. 8)には、上例(1)につき、「雖」は「惟」とも書かれるもので、これは、《詩經》(大雅・民勞)の中に、「戎雖小子、……」(「戎」は「汝」の意味)とあるのと同じ句法であるとし、また、《尚書覈詁》も、例(2)の「惟」について、これは「雖」と読むものであるとし、「唯」が他の本では「雖」と書かれているもののあることをあげて、その証拠としている。このような説を取っている人は、他にも多いのであるが、このような見かたをしたのでは、上古漢語におけるもののいいかたの真の姿をとらえることができないものと考ええる。

まず、「惟」と「雖」とは、異なった音のものであったにちがいない。同じ諧声系統に属し、上古音ともに「微」部に属するものではあるが、「惟」は、前述のように、喉音系のものと考えられるのに対して、「雖」は、《広韻》では、「心」母のもので、上古においても、齒音系のものと考えられるものである。

次に、この「惟」を「雖」の用法のものと見れば、その句の意味がわかりやすくなることはたしかである。しかし、その「意味がわかりやすくなる」ということは、春秋以後の古代漢語の標準的な表現に近くなるということである。最初に、<はしがき>の中に書いておいたように、西周以前と春秋以後とでは、その言語に、かなり大きな変化があったのであるから、この春秋以後の漢語を標準として、西周以前の上古漢語を論ずることは、きわめて危険である。

「雖」は、主として転折関係を表わす連詞として用いられるものである。しかし、この「雖」が多く用いられるようになったのは、春秋以後のことである(注15)。それで、上例(1)(2)の「惟」を「雖」と同じ機能の連詞と見ようとすることは、時代錯誤である。西周の頃には、まだ「雖」という連詞によって、分句間の転折関係を語法的に明示する表現法は、まだあまり発達していなかったのである。その分句間の関係は、その前後の分句の個々の意味から、直観的に看取することに委されていたのである。上例(1)(2)の「惟」は、ただその述語にあたるものを強調しているに過ぎないのであって、後の分句との関係までも表わす連詞的な機能をもっていたものとはいえない。それは、「而」によって連結されている述語間の関係が、その意味からすれば、逆接の場合もあり、順接の場合もあるのと、あい通ずるところがある。「而」は、しかし、中性的ながら、なお連詞

(注15) 《書經》の中に、「雖」が用いられているのは、<洪範>に1、<召誥>に1、<顧命>に1、<呂刑>に2、<秦誓>に1、合計6字にすぎない。《詩經》では、やや多くなり、全体で、24字である。なお、甲骨文には、この文字は見えない。

の機能をもつものということができるのであるが、「惟」は、そのような機能さえもないものといわねばならない。このように、分句と分句との間の関係が、語法成分によって明示されずに、個々の分句がばらばらで、その間に断層の多いことが、上古漢語の重大な特徴であるといわねばならない。

しかし、聴き手の直観的な聴取に期待するにも、その限度がある。《書経》が現代のわれわれにきわめて難解なのは、この点もその主要な一因をなしている。それで、分句間の関係を表わす語法成分も、次第に発達して来ている。前に1・3・1に述べた並列関係の連詞の発達も、その傾向を表わしている。転折関係を表わす連詞としての「雖」も、このような語法成分発達の中の一環として、春秋時代になってから、多く用いられるようになって来たものと考えられる。その「雖」は、上例(1)(2)のように、「惟」を用いている分句が、意味の上では転折的な関係をなしているものがあることからして、その「惟」から転化して発達し、その発音もまたそれに伴って変って来たものと考えられる。しかしながら、春秋以後においても、なお、その当時の文言的表現として、「惟」を用いることが、その書きことばの上においては、よく行われていたものと考えられる。春秋以後の文献の中で、その「惟」を「雖」とおきかえることによって意味がわかりやすくなるものがあるのは、おそらくは、このためであろうと考えられる。それで、それらは、上古的な表現の名残りともいいうるものである。

上古漢語の特徴をとらえる一つの鍵になるものとして、「惟」については、なお説くべきことが多い。ほかの虚詞との関係をよく検討しておく必要もある。またの機会に、つづいて拙見を発表することにする。(1967. 10. 16)